The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	翻刻「中井先生懐旧談」
Author(s)	草野, 友子
Citation	懐徳堂研究. 2011, 2, p. 85-92
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/24651
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

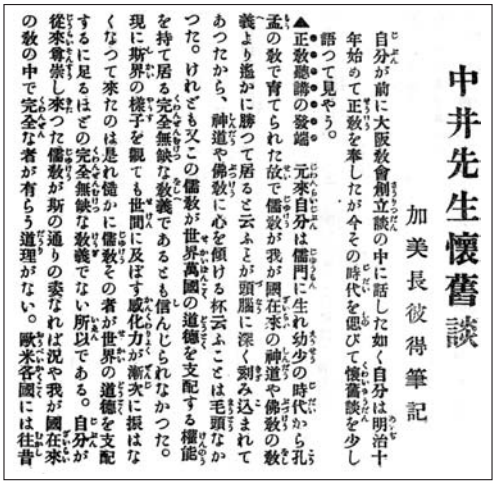
翻刻「中井先生懐旧談」

草野友子

本稿は、『正教新報』第七一七号（明治四十三年十月十五日）掲載の「中井先生懐旧談」を翻刻したものである。

「中井先生懐旧談」は、中井竹山・履軒の曾孫、中井木菟麻呂がどのような経緯で正教会に入信したかについて、加美長彼得（かみながペトル）氏の聞き書き形式で記されている。これまで懐徳堂の関係資料の中には、その経緯を示すものがほとんどなかったが、大阪ハリストス正教会司祭、ダヴィド水口優明氏より正教会の資料をご提供いただき、その詳細を知ることができた。

原文は旧字体・旧仮名遣いで書かれているが、本稿では新字体・新仮名遣いに改めている。ただし、引用されている手紙や詩文については、原文に則して旧字体・旧仮名遣いとしている。また、句読点を補うべきであると考えられる箇所があるが、原文のまま掲載した。ルビは原文に沿って付し、原文中の固有名詞、難解な語句、誤字・脱字・衍字について注記が必要な箇所などについては、草野が注を施した。



中井先生懐舊談

加美長彼得筆記

自分が前に大阪教會創立談の中に話した如く自分は明治十年始めて正教を奉したが今その時代を思ひて懐舊談を少し語つて見やう。

▲正教總勝の發端　元來自分は儒門に生れ幼少の時代から孔孟の教で育てられた故で儒教が我が國在來の神道や佛教の教義より遙かに勝つて居ると云ふことが頭腦に深く刻み込まれてあつたから、神道や佛教に心を傾ける杯云ふことは毛頭なかつた。けれども又この儒教が世界萬國の道德を支配する權能を持て居る完全無缺な教義であるとも信んじられなかつた。現に斯界の樣子を觀ても世間に及ぼす感化力が漸次に振はなくなつて來たのは是れ慥かに儒教その者が世界の道德を支配するに足るほどの完全無缺な教義でない所以である。自分が從來尊崇し來つた儒教が斯の通りの衰なれば況や我が國在來の教の中で完全な者が有らう道理がない。歐米各國には往昔

「中井先生懐旧談」
『正教新報』第七一七号（明治四十三年十月十五日）掲載

中井先生懐旧談

加美長彼得筆記

自分が前に大阪教会創立談の中に話した如く自分は明治十年始めて正教を奉したが今その時代を偲びて懐旧談を少し語って見よう。

▲正教会聴講の発端

元来自分は儒門(1)に生れ幼少の時代から孔孟の教で育てられた故で儒教が我が国在来の神道や仏教の教義より遥かに勝って居ると云うことが頭脳に深く刻み込まれてあったから、神道や仏教に心を傾ける杯(2)云うことは毛頭なかった。けれども又この儒教が世界万国の道徳を支配する権能(3)を持って居る完全無欠な教義であるとも信んじられなかった。現に斯界の様子を観ても世間に及ぼす感化力が漸次に振わなくなって来たのは是れ慥かに(4)儒教その者が世界の道徳を支配するに足るほどの完全無欠な教義でない所以である。自分が従来尊崇し来った儒教が斯の通りの姿なれば況や我が国在来の教の中で完全な者が有ろう道理がない。欧米各国には往昔から耶蘇教(5)と云う教義が行われてる(6)るが是も亦旧（カトリック）新（プロテスタント）二派に分れていて前者には種種雑多な弊害があり、後者には又前者に反抗して興った所から同じく弊害を免れぬと共に各自独特の学説を称え我儘勝手な解釈を下して遂には旧典をさえ破壊して居る有様であるから、是も亦完全な教でない事は明白である。けれども此の人間世界の存在せる以上は何処かに世界万国の道徳を支配するほどの権能を持って居る完全無欠な宗教が必ずなければならぬ筈である。されば欧洲文明諸国の中に何処かにそれがあるに相違ないと固く信じ日夜思念を凝して理想の宗教を渇望して居った。所が或日友人古林見蔵(7)という人が尋てねてきて(8)云うには、『私はこの頃『正教』という宗教を聴いて居るがこれは同じ耶蘇教でも旧教でもなければ新教でもない開教の初から今日まで完全無欠の教義を継承して万古不易なる宗門である故に之を『正教』と云うのである。君如何じゃ試みに聴いてみては』と熱心に勧められた。その時自分は『正教』の二字が最も強く心線に響いて元も言われぬ深い印象を受けた。殊に自分が多年渇望した、天下に是非なければならぬ完全無欠の教法と云うので、俄かに聴講の望が胸の中に湧いたばかりでなく、それと共に天下の完全な宗教はこれに相違ないと固く信んじた。其処で古林氏の手を経て其頃大阪にこられた高屋伝道師(9)に

紹介して貰って愈々正教の真理を聴くことになったこれが自分の聴講の発端である。

▲教理研究の経路

自分が正教を調べた経路や心状は普通とは少し趣を異にして居る。多くの人々は幾度か教師と彼是議論を戦わせて己が心の疑団を氷解せしめぬうちは容易に信仰を起さないのが通例である。然るに自分は最初『正教』の二字を聴いた時既に天下唯一の宗教であると確信して同時に聴講の念を起したのであるから自分が教に進んだのは教義を委しく聴いて後に信じたのではなくて最初から信じて後に聴いたのである。夫故お蔭で教義を調べる途中に些の疑問も起らなかった。全体自分が教義を研究した経路は無論初め高屋伝教者に就いて教導せられたに相違ないが又一方には斯う云う思想を以て居った、一体宇宙の真理を研究するに人と議論して説き伏せられたり又は説明せられたりして後に漸く会得するようでは宇宙の真理を補捉する眼識が足らぬ。真偽の別は大抵一見してわかる者で、そう面倒な者ではない。それ故何でも自力で以て精神を籠めて研究して唯難解の所だけ教師に聴けば沢山である。先ず自修するに若かずと考えて居た。当時研究して信仰の土台を築いたのは天道溯源、教の鑑、夫に次いで新約聖書（各漢文）であった。そうして是等の教書を反復熟読するに従って次第に興味を覚え、同時にハリストス正教の真意も克く解し得られる様になり、愈々この教が予想に違わず世界人類を支配する完全無欠の教で、然も人類生命の糧で寸時も棄て置くことの出来ぬ緊要な者であるとの信念が強くなった。今から考えて見れば決して自分が勝手に開拓したのではなくて神の啓導し給いたることが歴然としてわかって居る。

▲ハリストス教と儒教との接触

自分が儒門より出てハリストス教を信じた為に先祖代々尊奉し来った儒教を棄ててハリストス教に転宗したように思う人もあったがこれは道理が違う。他の宗教の如く一の目的物を立てて自宗の運命をそれに任せて居る者ならば此を棄てて彼に転ずるということはあるが、儒教の如く宗教上の意味を持っていない者には其様なことはいえぬ。世の学者の均しく認むる如く儒教は唯人倫道徳の教としては実に立派な教である。そしてハリストス教と調和して居る点も随分多い。左れどハリストス教に及ばぬ点は最も多くある。例示せばこの教は現世教で来世の事は少しも説いていない、又人格的の神も認めて居らぬその他世界人類を指導する上に不完全な点を列挙

せば随分少くないそれで自分はこの欠点をハリストス教で以て補わんとて真の完全無欠なる教に就いたのである。自分は追々他の儒教者をも導きたいと思うから、将来に於て儒教とハリストス教との関係又はハリストス教を以て儒教を補足すべき点其他種々自分の信仰の告白など書いて現代の儒学者の為めに世に公にする積り(10)である。

▲親戚の窘逐(11)

偖談話変って自分が愈々正教を奉じた時一身上に大なる打撃を蒙った。所謂窘逐である。それは故懐徳書院の教授並河樺翁(12)と云う自分の外祖が自分の正教を奉じたことを聞いて非常に憤激して遂に自分に対して祖孫の縁まで切り果てはその家の閾を踰えることさえ禁じたのであった。この外祖は自分を幼少の時から非常に愛して呉れたが、所謂可愛さ余って憎さが百倍の譬の如く全く打って変って疎斥したのである処で自分は一応外祖の前に信教の理由を弁明したいと思うて漢文の書牘を作って亡父桐園(13)の手を経て外祖に差し出したが封緘の儘和歌一首を添って父の許に還附せられた、今でも保存してあるが其歌は、

眞心を失ふ(14)もの、かく文は
　ひやうし紙をも視るもものうし
　　洞園子へ　　返廢〳〵

その後は斯る有様で自分とは全く断絶の姿であった。死去の時なども通知せられなかったので遂に会葬することも出来なかった。

またその外祖の娘閏菊と云う自分の叔母も外祖同様自分を可愛がって呉れたが、是も亦厳父の志を続いで矢張道義衝突の為に自分を憎む様になった、程経て後自分が少しは心が柔らいだであろうと思うて長文の手紙を送って見た処が左の三首の和歌を以て答えられた。

我意につのりて家の恥をも忘れまさなき道に迷ふ事
のいまはしくて音づれせらる毎にいと物うければ
ち筋思ふ眞心あらば遠津祖の
　家のおきてをなぞ守らざる
亡き父の教をそむく其の身こそ
　をばと思ふな甥とおもはじ
祖父親の重きいさめは聞もせで
　今更おばをしとう愚さ
　　閏子

上述の如く外祖と云い叔母と云い自分が正教に入ったのを非常に立腹したが唯理由なく徒らに嫌うたわけではない。是全く孔教擁護の為であって決して悪い心ではなかったのである。新旧思想は常に衝突を免れず、殊に外祖は宗教のみでない西洋の事や維新後の政事文物など皆嫌って

聖道蓁蕪茅寒レ天。如レ崩二厥角一萬人顛。
後凋誰是峯松柏。霜雪林中獨卓然。

と云う一首の詩に平生の抱負を漏らして居ったほどの人であったから、是位の事のあるのは普通の事で深く咎むべきて(15)はない。故に自分は決してわるくは思っていない偏に其罪の赦されんことを祈るのみである。

▲家門の光栄

外祖などは自分の正教に入ったのを先祖の教に背いて邪道に陥ったように誤想したが、自分の所信は全くこれと反対で吾が懐徳書院先哲の遺徳に藉りて神の特別の恩寵に浴したればこそ他の儒門諸名家の後裔に率先して正教の真理を受くることを得たので、是我が家門に取りて誠に光栄の至りである。孔孟顔曾(16)の諸聖賢を起して今の世に出てしめたならば、決して其様な頑固な事は云わぬにきまって居る、だから孔孟の教を受けついで尊奉する者も天下の公教に出遇ったならば、直にそれを捕捉するのが善く孔孟の旨を守る者である。吾が諸先哲に対しても矢張同様であると斯う信じて居る。夫であるから自分の浅学不才なるにも拘らず、自分一身に於て孔門の道徳の教を一転して、ハリストス正教に接合することを得たことは自分の常に歓喜に堪えぬ次第である。

なお、「中井先生懐旧談」の内容を紹介したものとして、ダヴィド水口優明「なぜ中井木菟麿氏は正教徒になったのか」(『正教時報』二〇〇九年二月)があるが、あくまで正教会側の視点で書かれたものであるため、以下、懐徳堂側の視点から整理しておきたい。

①中井木菟麻呂の正教入信の契機

木菟麻呂はある日、友人である古林見蔵氏に正教の聴講を勧められた。その際、「正教」の二字が強く心線に響き、正教が「完全無欠」の宗教であることを確信した。これが聴講の発端となる。そして、「自分は最初『正教』の二字を聴いた時既に天下唯一の宗教であると確信して

同時に聴講の念を起したのであるから自分が教に進んだのは教義を委しく聴いて後に信じたのではなくて最初から信じて後に聴いたのである。」とあるように、正教会の教義を聞いて信仰をはじめたのではなく、「正教」の二字を聞いたときから信じており、後に聴講をしたという先後関係であったと振り返っている。

②儒教と正教

懐徳堂で生まれ幼少期を過ごした木菟麻呂にとって、「儒教」の教えは深く脳に刻まれていた。しかし、木菟麻呂にとって儒教は「完全無欠な教義」であるとは信じられなかった。そんな中、「正教」という「完全無欠な宗教」と出合ったわけであるが、これをもって木菟麻呂は儒教と決別したわけではない。「将来に於て儒教とハリストス教との関係又はハリストス教を以て儒教を補足すべき点其他種々自分の信仰の告白など書いて現代の儒学者の為めに世に公にする積りである。」と言うように、木菟麻呂にとって正教は儒教を補足すべきものであった。

ただし、木菟麻呂の行動は、懐徳堂関係者には理解されない。木菟麻呂の外祖で、懐徳堂最後の教授であった並河寒泉については、「自分の正教を奉じたことを聞いて非常に憤激して遂に自分に対して祖孫の縁まで切り果てはその家の閾を踰えることさえ禁じたのであった。」と言う。木菟麻呂をかわいがっていた寒泉にとって、木菟麻呂の行動は、信じがたい事実だったのであろう。寒泉は木菟麻呂の弁明には一切耳を傾けず、和解することがないままに死去する。叔母の閏菊も同様に木菟麻呂を許さず、怒りを込めた絶縁状とも取れる和歌を木菟麻呂に送る。それらについて木菟麻呂は、彼らは理由なく立腹したわけではなく、「孔教擁護」のためであって悪い心はなかった、と振り返っている。儒教と正教、それぞれの教えは木菟麻呂にとって矛盾しないものであったが、そうした考えは、懐徳堂関係者には全く受け入れられなかったのである。

その後、木菟麻呂は懐徳堂の再興に奔走し、明治四十三年（一九一〇）に懐徳堂記念会が設立、大正二年（一九一三）の財団法人としての認可、そして、大正五年（一九一六）の重建懐徳堂が建立された。重建懐徳堂が設立された後は、昭和七年（一九三二）と昭和十四年（一九三九）の二度にわたって中井家伝来の懐徳堂関係資料を懐徳堂記念会に寄贈した(17)。正教会入信後も、木菟麻呂にとって懐徳堂は非常に大きな存在だったのである。

注

（1）原文のルビは「じゅうもん」となっているが、「う」は不要であろう。原文に再び「儒門」の語が出てくる際には「じゅもん」となっている。

（2）原文ママ。正しくは「抔」（など）であろう。

（3）権利を主張し、行うことができる力。

（4）「慥かに」と読む。

（5）キリスト教の別名。

（6）原文ママ。原文は旧仮名遣いであるため、「ゐ」の誤字であると思われる。

（7）古林見蔵は、懐徳堂に居住していた名医、古林見宜（一五七九～一六五七）の子孫。中井木菟麻呂とともに受礼する。聖名はペトル。禅宗より改宗した。（『パウエル中井木菟麻呂小伝』、大阪ハリストス正教会、一九七九年、八頁）

（8）原文ママ。正しくは「尋ねてきて」であろう。

（9）高屋伝道師とは、高屋仲（聖名はイヤコフ。一八四〇～一九〇五）のこと。元仙台藩士で、明治正教会の元勲的存在。一八七一年頃から東北地方で伝道を皮切りに、一八七七年に司祭となってからは大阪や中国地方、さらには九州の教会を牧会し、この地で死亡した（中村健之介ら編訳『宣教師ニコライの日記抄』、北海道大学出版会、二〇〇〇年、五二九頁）。

（10）原文ママ。正しくは「積り」であろう。

（11）原文では「窘遂」となっているが、正しくは「窘迫」であろう。「窘遂」とは正教会用語であり、一般でいう「迫害」のこと。

（12）並河寒泉のこと。木菟麻呂にとっては母方の祖父にあたる。並河寒泉（一七九七～一八七九）は、中井竹山の外孫で、並河尚誠に嫁した竹山の娘とじの子。懐徳堂最後の教授。十七歳で伯父の中井碩果の門に入り、懐徳堂で教鞭を執った。一旦懐徳堂を離れたが、碩果の死去に伴い、四十四歳の時に教授となる。懐徳堂の経営・維持に努め、また文庫の建築、『逸史』の上梓などの事業を推進した。明治二年（一八六九）、懐徳堂の閉校後、城北の本庄村に転居した。著書に『弁怪』など。寒泉の娘は、寒泉と同時期に預り人を務めた中井桐園に嫁いだ（湯浅邦弘主編『懐徳堂事典』、大阪大学出版会、二〇〇一年、一九〇頁）。

（13）中井桐園のこと。中井桐園（一八二三～一八八一）は、中井柚園の子で、中井碩果の養子。血縁上は中井履軒の孫、戸籍上は中井竹山の孫に当たる。中井碩果の死去に伴い、十八歳で懐徳堂最後の預り人となる。年少で懐徳堂の預り人に就任したため、並河寒泉の指導・教育を受けつつ懐徳堂の経営に参画し、懐徳堂および並河・中井両家を財政面で支えた。懐徳堂閉校後、転居を繰り返しながら、家塾・私塾・小学校などで教鞭を執った。（前掲『懐徳堂事典』、一九一頁）。

(14) 原文ママ。正しくは「失ふ」であろう。
(15) 原文ママ。正しくは「で」であろう。
(16) 孔子・孟子・顔淵・曾参のこと。
(17) その詳細や経緯については、竹田健二『市民大学の誕生――大坂学問所懐徳堂の再興――』(大阪大学出版会、二〇一〇年)、中井木菟麻呂「懐徳堂遺物寄進の記」(『懐徳』十一号、懐徳堂記念会、一九三三年)、吉田鋭雄「懐徳堂水哉館遺書遺物目録」(『懐徳』十七号、懐徳堂記念会、一九三九年)、竹腰礼子「懐徳堂文庫を守った人――中井木菟麻呂の功績――」(『大阪あーかいぶず』、大阪府公文書館、一九九〇年)などに詳しい。